高校福祉科教育の高度化をめざすシラバス研究

宮 嶋 　 淳

Research on Syllabus for Sophistication of High School Welfare Department

Jun MIYAJIMA

教育実践研究　第３巻第１号　別刷(2017年12月)
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from
Chubu Gakuin University and Chubu Gakuin College
Journal of Educational Research and Practice
Vol.3 No.1 : 187－196（December 2017）
Seki, Gifu, Japan

中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第１号(2017) 187－196

高校福祉科教育の高度化をめざすシラバス研究

宮　嶋　　淳[1)]

Research on Syllabus for Sophistication of High School Welfare Department

Jun MIYAJIMA

本研究では、高校福祉科教育のたどった変遷を踏まえ、高等学校学習指導要領等の改訂後の高校福祉科教育を担う教員養成について議論する。そのため、大学における教職「福祉」養成課程にある福祉科教育法の授業計画（シラバス）並びにシラバス研究について検討した。

その結果、今後の福祉科教育法のシラバスは、①授業の方法としての［演習］の評価の構造化、②教員と学生の双方向コミュニケーション・ツール化、③学生の自己成長エビデンス記録媒体化、④学科ポリシーに連動した教育システムの可視化のためのツール化という諸点を克服できるよう総合的な改善が求められる。そうした改善は、高校福祉科教育の高度化に寄与するツールの開発となり、福祉科教員をめざす学生と社会の期待に応えられるだろう。

キーワード：高校福祉科、教育方法、シラバス

Ⅰ．問　　題

1998年７月23日、理科教育及び産業教育審議会から「今後の専門高校における教育の在り方等について」が答申され、高等学校における専門教育課程に教科「福祉」が登場した。その後、高等学校学習指導要領が改訂され、2003年４月から教科「福祉」が実施された。当時、福祉教育関係者は高校福祉科の拡張に歓喜し、大学での社会福祉学教育への接続を期待した。実際、全国で高校福祉科に学ぶ生徒は2008年に９万人を超え、高校福祉科教育の実態に即した研究が加速化した。しかし、保住（2005）は、大学教育における教職「福祉」の教員免許取得のための教育指導法が、ソーシャルワークとケアワークのどちらを基盤とすべきかが混沌とし、福祉科教員養成の教育内容と高校福祉科で学習される内容との間に齟齬があることを指摘した。その後、田村(2008)によれば、2007年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、高校福祉科教育の方向性が転換し、高校福祉科の高度化と多様化が福祉業界の中で改めて議論されるに至ったという。また、文部科学省は、平成21（2009）年３月に学校教育法施行規則の一部改正と高等学校学習指導要領の改訂を行い、高校福祉科で教育する専門科目を［７科目］から［９科目］に再編し、平成25（2013）年度の入学生から年次進行により高等学校学習指導要領等を実施し現在に至っている。

本研究では、こうした高校福祉科教育のたどった変遷を踏まえ、高等学校学習指導要領等の改訂後の高校福祉科教育について議論する。特に保住が指摘した内容が、10年を経た今、実際の大学教育の中で如何なる状況にあるのかを、授業計画（シラバス）を分析することから探索する。その上で、高校福祉科教育を担う教員を養成する教職福祉科課程における福祉科教育法のための授業計画（シラバス）について、高校福祉科教育の高度化を視点として、その有り方を提言する。

1）人間福祉学部人間福祉学科

Ⅱ．方　法

本研究は、文献及び資料研究とする。高校福祉科における教育について研究並びに実践の蓄積を行ってきた日本福祉教育・ボランティア学習学会の年報並びに学会誌及び出版物を福祉業界の英知の集積と位置づけた。シラバス研究の動向についてはCiNii Articles（国立情報学研究所）を用いて検索キーワード［シラバス＋構成要素］［シラバス＋構築］［シラバス＋福祉］［シラバス＋特徴］で、国内の論文（203本）を収集した。教職課程「福祉」を開設している大学の情報については、文部科学省のホームページから一覧を検索した後、各校のホームページにアクセスし、一般公開されているシラバスを収集した。収集したシラバスはExcelに転記し、大学名並びに担当教員名を匿名化し、IDを付した上で分析を行った。

Ⅲ．結　果

(1) 改訂高校福祉科学習指導要領等の概要

文部科学省（2010）によれば高等学校学習指導要領・福祉科の改訂の要点は、①教科の目標＝変更しない、②科目編成＝介護分野における多様で質の高い福祉サービスを提供できる人材の育成や介護福祉士にかかる制度改正への対応を行うため科目構成を見直し、９科目とした。③実施時期＝各学校の判断により平成21年度以降、とされている。変更されない教科の目標は「社会福祉に関する基礎的・基本的な知識と技術を総合的、体験的に修得させ、社会福祉の理念と意義を理解させるとともに、社会福祉に関する諸課題を主体的に解決し、社会福祉の増進に寄与する創造的な能力と実践的な態度を育てる」である。再編された９つの科目の目標・内容・必要単位数は、表１のとおりとされている。

表１　学習指導要領「福祉」の目標・内容等

科目名	目標	内容	単位数
社会福祉基礎	社会福祉に関する基礎的な知識を習得させ、現代社会における社会福祉の意義や役割を理解させるとともに、人間としての尊厳の認識を深め、社会福祉の向上を図る能力と態度を育てる	(1)社会福祉の理念と意義 (2)人間関係とコミュニケーション (3)社会福祉思想の流れと福祉社会への展望 (4)生活を支える社会保障制度	2～6
介護福祉基礎	介護を必要とする人の尊厳の保持や自立支援など介護の意義と役割を理解させ、介護を適切に行う能力と態度を育てる。	(1)介護の意義と役割 (2)介護福祉の担い手 (3)介護を必要とする人の理解と介護 (4)介護における安全確保と危機管理	2～6
コミュニケーション技術	コミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させ、介護福祉援助活動で活用する能力と態度を育てる。	(1)介護におけるコミュニケーション (2)サービス利用者や家族とのコミュニケーション (3)介護におけるチームのコミュニケーション	2～4
生活支援技術	自立を尊重した生活を支援するための介護の役割を理解させ、基礎的な介護の知識と技術を習得させるとともに、様々な介護場面において適切かつ安全に支援できる能力と態度を育てる。	(1)生活支援の理解 (2)自立に向けた生活支援技術 (3)終末期・緊急時の介護	4～12
介護過程	人間としての尊厳の保持と自立生活支援の観点から介護過程の意義と役割を理解し、介護過程が展開できる能力と態度を育てる。	(1)介護過程の意義と役割 (2)介護過程の展開 (3)介護過程の実践的展開 (4)介護過程とチームアプローチ	2～6
介護総合演習	介護演習や事例研究などの学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、課題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てる。	(1)介護演習 (2)事例研究 (3)調査、研究	2～6
介護実習	介護に関する体験的な学習を多様な介護の場において行い、知識と技術を統合させ、介護従事者としての役割を理解させるとともに、適切且つ安全な介護ができる実践的な能力と態度を育てる。	(1)多様な介護の場における実習 (2)個別ケアのための継続した実習	4～16
こころとからだの理解	自立生活を支援するために必要なこころとからだの基礎的な知識を習得させ、介護実践に適切に活用できる能力を育てる。	(1)こころとからだの基礎的理解 (2)生活支援に必要なこころとからだのしくみの理解 (3)発達と老化の理解 (4)認知症の理解 (5)障害の理解	2～12
福祉情報活用	社会における情報化の進展と情報の意義や役割を理解させるとともに、情報活用に関する知識と技術を習得させ、福祉の各分野で情報及び情報手段を主体的に活用する能力と態度を育てる。	(1)情報社会と福祉サービス (2)情報モラルとセキュリティ (3)情報機器と情報通信ネットワーク (4)福祉サービスと情報機器の活用	2～4

表2　介護福祉士養成課程における関連科目の目標・内容等

科目名	目標	内容	単位数
介護の基本	「尊厳の保持」「自立支援」という新しい介護の考え方を理解するとともに、「介護を必要とする人」を、生活の観点から捉えるための学習。また、介護における安全やチームケア等について理解する。	(1)介護福祉士を取り巻く状況、役割と機能 (2)尊厳を支える介護、自立に向けた介護 (3)介護を必要とする人の理解 (4)介護サービス、介護実践における連携 (5)介護従事者の倫理、安全の確保とリスクマネジメント	12
コミュニケーション技術	介護を必要とする者の理解や援助的関係、援助的コミュニケーションについて理解するとともに、利用者や利用者家族、あるいは多職種協働におけるコミュニケーション能力を身につける。	(1)介護におけるコミュニケーション (2)介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション (3)介護におけるチームのコミュニケーション	4
生活支援	尊厳の保持の観点から、その人の自立・自律を尊重し、潜在的能力を引き出し、見守る、適切な介護技術を習得する。	(1)生活支援 (2)自立に向けた居住環境の整備、身じたく・移動・食事・入浴・排泄・家事の介護	20
介護過程	他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切な介護サービスの提供ができる能力を養う。	(1)介護過程の意義 (2)介護過程の展開 (3)介護過程の実践的展開 (4)介護過程とチームアプローチ	10
こころとからだの理解	介護技術の根拠となる人体の構造や機能及び介護サービスの提供における安全への留意点や心理的側面への配慮について理解する。	(1)こころとからだのしくみの理解 (2)身じたく・移動・食事・入浴・排泄・睡眠・死にゆく人のこころとからだのしくみ	8

なお、介護福祉士養成課程における関連科目の目標・内容等を抽出すれば、表2のとおりである。

表1と表2の内容に重なりが多いことが了解できる。国は、高校福祉科における専門科目教育を職業教育（キャリア教育）と位置づけ、高校における就業体験を実習に読み替えられることとしている。教職「福祉」の免許を取得するために取得しなければならない「教科に関する科目」は、教育職員免許法施行規則第5条において、①社会福祉学（職業指導を含む。）、②高齢者福祉、児童福祉及び障害者福祉、③社会福祉援助技術、④介護理論及び介護技術、⑤社会福祉総合実習（社会福祉援助実習及び社会福祉施設等における介護実習を含む。）、⑥人体構造及び日常生活行動に関する理解、⑦加齢及び障害に関する理解とされ、それぞれ1単位以上計20単位を修得するものとされている。

高等学校学習指導要領の改訂後の高校福祉科の教育内容は、保住が指摘した「ケアワーク教育」に親和性がある。また、高校福祉科の教育を行うための教員養成の教科科目も「ケアワーク」を主体とした組み立てになっている。制度上、高校福祉科の教育並びに高校福祉科教員養成は、ともに「ケアワーク」に傾倒している。

(2) シラバス研究の到達点

高校福祉科教育を担う教員は、教育職員免許法等に規定される教科及び教職に関する所定の科目の単位を取得し大学を卒業していなければならない。そこでこの節では、高校福祉科教育を担当するための教育課程及び指導法に関する科目が、当該教育課程を有している大学においてどのような内容によって教育されているのかを検討する。福祉科教育を指導するための教職に関する科目は、福祉科教育論や福祉科教育法という科目名称で開講されていることが多い。開講されている科目がどのような内容で行われているのかを知るためには、授業計画（シラバス）が参考になる。中島（2016）によれば、授業設計図であるシラバスが充実していることで、教員は安心して授業が進められる。一方、学生は充実したシラバスを読むことで学習への動機付けを高め、自分が現在取り組んでいる課題がどこに向かうためのものかを知ることができ、授業に積極的に参加することができ、学生の高い学習成果につながるとする。シラバスは、大学や教育プログラムの質や適格性を評価する際に用いられ、大学基準協会や大学評価・学位授与機構、並びに日本高等教育評価機構も、評価の基準の一つとしている。このことからシラバスとは、作成した教員個人だけではなく、組織全体の評価につながる、公表された尺度であることを認識しておく必要がある。

わが国におけるシラバス研究には、いくつかの特徴がある。第1にシラバスの定義に関わる研究があり、那須（2009）は①狭義のアプローチと②広義のアプローチを区分した。後者には活動の選択に関わ

る方法論が含まれている。第２に情報発信媒体としてのシラバスの研究がある。伊東・島松・廣川(2006)はWebシラバスによる情報ライブラリーの構築を提言した。松崎・徐（2009）は、時間割をベースとする授業関連情報のポータルシステムを構築する際、シラバスが学生側と教員側を橋渡しすると指摘した。堀・西森・今井・中山（2013）はシラバスを活用して年々変化する大学の授業科目の多様性や内容の変化を掌握し、科目間ネットワークの構築が求められると指摘した。北村（2016）はシラバスを受験生に公開し、各学科・コースの特徴が反映されていることや成績評価の方法と結びつけている。第３にシラバスを改善し、授業の組み立ての理論化、授業マネジメントのための研究がある。大池（2009）は、学生によるフィードバックと授業改善が継続的にサイクルのように作用することにより授業が改善するとし、その改善が反映されているのが授業シラバスであるとした。そして第４にシラバスを活用した授業改善の実践事例研究がある。腰山（2006）は、実習の前後におけるシラバスの修正を構想し、授業者の資質と特徴を最大限に発揮する方法を報告している。堀・中山・今井（2011）は、時間割作成を制約充足問題と捉え、個々の学生の興味、学習戦略をシラバスに出現するキーワードを用いてユーザープロファイルするモデルの構築を実践報告している。福田・屋台・釜土（2015）は、介護福祉士養成校におけるコアシラバスを活用した授業改善の事例を報告している。坂井（2014）は、Webシラバスシステムをプラットフォームとして「教育課程の有機的な体系化」と「教員間の組織的な協働」を強力に推進する必要性を報告している。

ここから見えてくるシラバス研究の到達点は、第１にシラバスは、大学における授業マネジメントの一角に位置づけられ、当該科目の教育の内容等を「公開」するツールである。第２に「公開」の方法としてWeb活用が主流となり、大学教育を教授する側の者（教員等）とそれを受けようとする側の者(学生、あるいは保護者や高校教員）のICTを創造している。第３にシラバスを活用した結果を踏まえて、学生のニーズに対応した授業改善の結果を反映させた教材である。このことは中島（2016）の指摘と共通している。すなわち、中島（2016）はシラバスとは「授業の雰囲気や教員の人柄を伝えるツール」にもなり、「学生は、教員の意図に加えて授業の雰囲気や授業に対する教員の熱意なども読み取る」と、教員と学生とのコミュニケーション・ツールとしてのシラバスの意義を指摘している。

(3) 教職福祉・福祉科教育法シラバス

文部科学省によれば、高等学校教員（福祉）の免許資格を取得することのできる大学のうち、通学課程において一種免許状（大学卒業程度）がとれる大学は、109校である。文部科学省が示した一覧表をもとに、逐一各大学のホームページを検索し、公開されているシラバスを収集した(2016年11月～12月。収集できたシラバスは2015年度版ないし2016年度版)。とくに本稿の課題とする教職福祉における「教職に関する科目」である「福祉科教育論」や「福祉科教育法」（以下「福祉科教育法等」という。）に焦点を当て、シラバスを収集した。シラバス上で表示されている項目は表３のとおりであった。基本的にはA4版で２～３頁に収められ、科目担当教員から学生へのメッセージが記述されていた。

表３　福祉科教育法等のシラバスに含まれる項目

開講番号、講義コード、対象学生、年度、科目名、開講期間・曜日・時限、担当者氏名
履修年次、単位数、科目分類、分野系列、履修条件、事前登録の有無、教職課程関連科目表示
授業の概要、テーマ、副題、ねらい、履修しておくことが望まれる科目、キーワード
学習上の到達目標、授業の方法、達成評価指標、授業形態、学習方法、教育方法、授業計画
授業時間外の学習の目安、自己学習、授業の運営方法、担当教員からのメッセージ、履修者上限
評価基準、成績評価の方法・比率（%）、フィードバックの方法、オフィスアワー、質問・相談等
テキスト、参考書、参考URL、実習材料費等、他学部・他学科受講可否、単位互換、外部リンク
留意点、その他特記事項

次にシラバスに記述されている具体的な内容を見ていく。調査対象とした大学の表３で示した各項目についてExcelシートに落とし込み、その後、テキストデータをIBM SPSS Analytic for Surveys 4、0で集計並びにカテゴリー分析を行った(表４～表７、図１)。

表４の結果より、調査の対象とした科目が、[教育＋指導＋教科] に関わる科目であり、受講者の教

員としての［資質＋知識＋意義］を向上させ、［高等学校教員免許＋学習］であることがわかる。すなわち、示されているシラバスから、当該内容に関する例文を示せば、次の通りである。

高等学校における教科「福祉」教員免許取得をめざす者を対象として、福祉について教え伝えることの意味や目的、福祉教育の意義を考えながら、福祉科教育の理論と実際について学ぶ。特に、高等学校福祉科の理念や指導内容等についての基本的理解、学生の福祉観の捉え直し、福祉科の学習指導方法の体験的実践的理解をめざしたい。

表４　授業のねらい

カテゴリー	頻出度(%)
教育	90.0
指導	45.0
教科	40.0
資質	35.0
知識	35.0
意義	30.0
教員	25.0
学習	20.0
高等学校教員免許	5.0
高校の教科	5.0
演習形式	5.0
連携	5.0

表５　授業の到達目標のカテゴリー（前期・後期）比較

前期		後期	
カテゴリー	頻出度(%)	カテゴリー	頻出度(%)
教育	33.1	教育	15.3
学習	21.7	学習	14.0
内容	18.5	授業	13.4
方法	17.8	指導	8.3
目標	14.0	作成	8.3
知識	13.4	実践	6.4
教材	12.1	教科	5.1
科目	10.8	方法	4.5
実践	10.2	科目	3.8
社会	8.3	評価	3.2
作成	8.3	教材	3.2
技術	8.3	活用	2.5
創設	6.4	板書	1.9
福祉科教育	5.1	実習	1.9
展開	4.5	概要	1.9
構成	4.5	教員	1.3
福祉科教員	4.5	科目ごと	1.3
力+<>	4.5	年間計画	1.3
生徒	4.5	カリキュラム	1.3
資質	3.8	姿勢	0.6

授業の到達目標のカテゴリーを前期と後期で比較してみると、表５のようになる。特徴的なのは、後期に［教材＋板書＋実習］が組み込まれ、高校福祉科教育の概要を前期で学び、後期で具体的な教授方法に焦点が当てられていることが伺える。具体的な文例は次のとおりである。

（前期）高等学校の福祉科の教員免許状取得を希望する学生に、福祉科教育の目的、方法、教授に必要な指導技術の基本を体得することをめざす。授業の工夫や教材の検討、視聴覚教材による授業分析など望ましい授業のありかたを考える。

（後期）高校福祉科の授業の内容と実際に目の前にいる多様な生徒の生活や置かれている状況の関係性に配慮しつつ、ふくしーふだんの暮らしのしあわせーをどのように構築していくべきかを考え教授するのかを実践する力を得ることを目標とする。

１．板書計画や教材研究に丁寧に取り組むことにより、生徒の興味・関心をひきつけることのできる学習指導案を作成することができる。２．他者から模擬授業に対する評価を受けることにより、自らの授業における改善点を確認し、より良い授業が展開できるようになる。３．模擬授業を通して、次年度の教育実習で活用できる授業を展開する。

授業概要に関するテキストデータをカテゴリー化すると表６のとおりであった。授業は［福祉］に関することを学生が［理解］し、福祉課題を［主体的に解決］し、［広く＋探求＋培う］ために行われる。すなわち、「学習指導要領および同解説を材料として高校福祉科設置の背景とともに教科『福祉』および各科目のねらいを理解する。あわせて、教授法に関する具体的な知識と技術の獲得をめざし、模擬授業や教材作成を行う。」と示され、共通性が高かった。

授業の（指導）方法について、カテゴリー化してみると［形式＋<>］［学習＋<>］［アクティブ・ラーニング］［実習］［参加］［課題・レポート］が抽出された。形式には［講義・演習・実習］を含み、学習には［教材・予習・復習・学習指導要領］が含まれていた。

表６　授業概要のカテゴリー

カテゴリー	頻出度(%)
福祉	95.0
理解を深め＋<>	7.5
主体的に解決し＋<>	5.0
広く＋<>	2.5
探究する＋<>	2.5
培う＋<>	2.5

表７　予習・復習のカテゴリー比較

予　　習		復　　習	
カテゴリー	頻出度(%)	カテゴリー	頻出度(%)
社会＋<>	12.5	学習＋<>	60.0
新聞＋<>	12.5	ノート	40.0
作成	10.9	授業後	20.0
関連＋<>	9.4	要点	20.0
生徒＋<>	9.4	報告	20.0
課題	7.8		
教科	6.3		
コミュニケーション	4.7		
技術＋<>	4.7		
資料＋<>	4.7		

予習・復習に関するカテゴリー比較を行ったところ、表７のとおりであった。予習については、様々な社会資源や関連する多くの資料から情報を得、生徒理解の準備をさせようとしている。その一方で復習においては授業での［学習＋ノート＋要点］をまとめ、報告できるようにすることが求められているという共通点が認められた。予習の項目の記載を具体的に見ておくと次の通りである。

予習･復習を前提として授業を進める。よって、最新の社会福祉の動向把握に励み、実習指導室内の福祉新聞、統計資料、社会福祉小六法、視聴覚教材､各種参考文献等を積極的に活用する。また､近年の学校教育関連制度の動向を把握し、「教育と福祉の協働」についての関心を深める。さらに、地域活動への参加、ボランティア活動等を通して、児童生徒をはじめ異なる世代の人々と交流する機会を積極的に持ち、基本的な信頼関係形成力及びコミュニケーション力を身につけるように努める。

１．専門教科「福祉」教員免許を取得希望の学生だけでなく、将来ボランティアコーディネータや児童福祉などに関わる人にも有益な科目であると思われる。２．本講義と並行して、介護技術を修得することが望まれる。３．教科指導と生徒理解の為に､教室外での学習活動(フォーラムや学会への参加と学生企画への参画など)を推奨する。

科目における毎回の授業内容についてまとめると、図１のように整理できた。どの大学においても前期・後期の区分があり、前期第１回は「オリエンテーション」、15回目に「まとめ／総括」が行われている。後期においては第１回目に「オリエンテーション」が行われるケースと講義から始まるケースに二分されていた。

基本型	
1回	オリエンテーション～社会福祉を取り巻く現状と課題
2回	教科「福祉」創設の背景と経緯について
3回	「福祉科」教育の理念と意義について
4回	福祉科の指導法の概要
5回	学習指導要領改訂の経緯と内容について
6回	教科「福祉」のねらいと各科目の内容
7回	「社会福祉基礎」の目標とその指導法
8回	「介護福祉基礎」の目標とその指導法
9回	「コミュニケーション技術」の目標とその指導法
10回	「生活支援技術」の目標とその指導法
11回	「介護過程」の目標とその指導法
12回	「介護総合演習」の目標とその指導法
13回	「介護実習」の目標とその指導法
14回	「こころとからだの理解」の目標とその指導法
15回	「福祉情報活用」の目標とその指導法
16回	学習形態と指導方法
17回	教材の開発と工夫
18回	教科「福祉」学習指導案作成(1)
19回	教科「福祉」学習指導案作成(2)
20回	模擬授業とその評価・討議(1)「社会福祉基礎」
21回	模擬授業とその評価・討議(2)「介護福祉基礎」
22回	模擬授業とその評価・討議(3)「コミュニケーション技術」
23回	模擬授業とその評価・討議(4)「生活支援技術」
24回	模擬授業とその評価・討議(5)「介護過程」
25回	模擬授業とその評価・討議(6)「介護総合演習」
26回	模擬授業とその評価・討議(7)「介護実習」
27回	模擬授業とその評価・討議(8)「こころとからだの理解」
28回	模擬授業とその評価・討議(9)「福祉情報活用」
29回	福祉系高等学校の今後
30回	まとめ ～福祉科教員の資質と能力

Ⅱ型

社会福祉学と「福祉」教科
福祉教育実践史に学ぶ
理念の解説について(ノーマライゼーション)
理念の解説について(インクルージョン)
社会福祉法制について

Ⅲ型

実践理論の授業
実習と実習指導について
指導案・時案について
授業運営のあり方
年間指導計画の検討と学習指導案の作成
計画・準備・実施・評価
指導案の書き方と進め方
学習指導案作成
教材準備
授業における教師・生徒間の相互作用
授業における教材解釈と認識の変容
福祉科指導における学習集団の学習支援
福祉科授業の分析
福祉科授業の組み立て・構成
福祉科指導案の作成手順
福祉科指導案作成の実際
福祉科授業の実施準備

Ⅳ型

教材研究と模擬授業(アクティブラーニング・セブンクロス)
教材研究と模擬授業(アクティブラーニング・四段階討議法)
教材研究と模擬授業(アクティブラーニング・特定要因分析法)
教材研究と模擬授業(アクティブラーニング・コラージュ法)

図1　教職福祉・福祉科教育法等の毎時の授業内容

図1で整理できる毎時の授業内容の特徴は［基本型］を軸として、数的にバラツキがあるものの［Ⅱ型］［Ⅲ型］［Ⅳ型］に区分できた。基本型の特徴的な授業展開は、①高校福祉科に関する歴史や趣旨及び特徴、②学習指導要領に記載されている専門教科「福祉」に関する内容や留意、③専門教科「福祉」で教育する「9科目」それぞれの目標やその指導法、④教材研究、⑤教科に関する学習指導案、⑥模擬授業、⑦教科と教員の将来展望（まとめ）となっている。Ⅱ型は、基本型の授業展開を生かしつつ、社会福祉学の側面を強調する内容となっていた。Ⅲ型も授業展開は講義から演習に向いつつ、教育現場で即、活用できる教育実践に関する側面を強調した演習重視の内容となっていた。Ⅳ型では、模擬授業の展開方法にアクティブ・ラーニングを加え、かつアクティブ・ラーニングの様々な手法の修得がめざされていた。Ⅱ～Ⅳ型を基本型に加味していこうとすると、授業の展開方法や時間配分で工夫が必要であり、教育指導方法の高度化が求められるだろう。

(4) 結　果

2010年の高等学校学習指導要領・福祉科の改訂は、教科の目標に変更はないといわれるものの、科目編成が介護分野における多様で質の高い福祉サービスを提供できる人材の育成や介護福祉士にかかる制度改正への対応を行うための科目構成の見直しとなっており、ソーシャルワーク教育というよりはケアワーク教育に比重がおかれた教育となっていた。

大学教育の質保証あるいは評価基準の一角を占めるシラバス研究は、大学における授業マネジメントの進展、教育内容の「公開」ツールとして進化している。その有り様はWeb活用が主流となり、教育をする側と受ける側とのITコミュニケーションを創造する方向に進んでいる。そして、学生の事前学習ツールとしてのシラバスは、授業改善や教材改善に結びつき、双方向型の高度な教育を行うために欠かせない教育上の位置づけとなっていた。

専門教科「福祉」を担当する教員養成課程における教職に関する科目「福祉科教育法等」は、事前

学習を重視する半期科目として開講され、[半期×２＝通年] の積み上げ科目となっていた。同科目のシラバスは共通する授業のねらいや到達目標のもと、概ね［基本型］と［Ⅱ～Ⅳ型］に区分できる授業展開がなされていた。同科目のシラバスの記載内容からは、前記のような双方向型の高度なICT教育へと、同科目の授業展開が進展しているのかは判断できなかった。

Ⅳ. 考　　察

大学教育の改善のためにICT利用の活性化をめざす公益社団法人私立大学情報教育協会は、ICT利用教育改善研究発表会を2017年度においても開催した（期日：2017年８月９日）。この発表会において金沢工業大学の山本（2017）は、「学びの可視化と多様なアクティブラーニング（＝AL）を支援するe-シラバスの構築」を口演している。金沢工業大学は学生の「自己成長シート」で学生自らが自己の成長を確認し、「ポートフォリオシステム」で教員との双方向性を確保してきた実績がある。それに加えて「e-シラバス」を構築し、学生一人ひとりが毎時の授業に、どのように「参加」し、どのような成果を上げたのかをつぶさに電子媒体上に記録できるようになったのである。そして、「e-シラバス」への記録は個々の学生の「キャリアポートフォリオ」として保存することもでき、学生個々が自己の大学生活を一望できる。さらに蓄積されたデータは、学内IRで分析し、将来的にはAI的アプローチで解析していくという。シラバス単体でみても、その記述はA4版５頁にわたり、詳細な「達成度評価」や「評価の要点」が記述されていた。金沢工業大学のこうした取り組みをみると今後、シラバスは学生の授業への参加度や到達目標への到達プロセスについて、学生と教員の双方の合意により評価が行えるよう、コミュニケーション・ツールとしての役割が高まるだろう。また、シラバスによりチェックできる内容は、教員からの「お知らせ」ではなく、学生の学びと人間としての成長の記録を証明する「エビデンス」化し、「教員の制作物」から「学生の所有物」へと転換していくのではないだろうか。そうした方向でシラバスのIT化は進行している。例えば、眞喜志（2008）はWeb版のシラバス型パスファインダーを作成し、ニーズ把握とコミュニケーションの深まりに活用している。田村（2012）は、英語力に関する学生アセスメントを経て、その結果を踏まえた個別教育シラバスを構築している。薫（2013）は、多くの学生の支援システムがバラバラに運用されていることを憂い、教育を提供する側と受ける側の価値共創をめざすSDL（Service Dominant Logic）タイプの履修支援システムを試行している。伊藤・秋政・青井ら（2014）は、表現活動に関する統合型シラバスを構築し、学生が科目間の結びつきを視覚的に理解しやすくしている。林・河島（2016）は、ALの可視化に関する実践的研究を行い、ALの学習内容をポイントに換算し、その得点をシラバスに明記する学内制度を構築している。佐藤・八重樫・志水・川嵜（2015）は、シラバスの可視化の試みとしてグラフィック・シラバスの有効性を主張し、大学教育における展開例を報告している。

こうした動きを見てくると、福祉科教育法等のシラバス並びに教育方法は大きく転換を迫られているように考えられる。第１にソーシャルワーク教育やケアワーク教育で重視される「演習」という名のALは、社会福祉教育において「評価しづらいもの」とされてきた。しかし、他の学問領域に目をやれば、そのような従来の常識は否定されなければならない。第２にシラバスを、教育を提供する側と受ける側との双方向コミュニケーション・ツールに変換しなければならない。そして金沢工業大学の試みのように、シラバスを学生の所有物、自己成長のエビデンス記録に転換するシステムとして位置づけていくこと。最後にシラバスは単体科目で終結するのではなく、カリキュラムポリシーやディプロマポリシーと連動して進化していくシステムのツールでなければならない。これら４点において、福祉科教育法等のシラバス並びに教育方法は課題をクリアし、学生と社会が求める教育成果を可視化していかなければならない。

Ⅴ. 結　　論

本研究では、高等学校学習指導要領等の改訂後の高校福祉科教育を担う教員を養成する教職福祉科課程における福祉科教育法のための授業計画（シラバス）について検討した。その結果、上記考察で示し

たように福祉科教育法等のシラバスの高度化は、①[演習]の評価の構造化、②シラバスの双方向コミュニケーション・ツール化、③シラバスを学生の自己成長エビデンス記録媒体化、④学科ポリシーに連動した教育システムの可視化ツール化という諸点を克服し、高校福祉科教育の高度化に寄与するツールとして、学生と社会の期待に応えられる内容に高めていかなければならない。

引用文献

薫又硯（2013）「知識空間概念に基づく情報技術人材育成のための履修支援システムの提案」『研究技術計画』28, 323-332

福田明, 屋台安子, 釜土禮子, 他（2015）「『こころとからだのしくみⅢ』の授業改善手法とその効果」『松本短期大学研究紀要』24, 21-31

林透, 河島広幸（2016）「アクティブ・ラーニングの可視化に関する実践的研究－ALポイント認定制度の設計と効果を中心に－」『大学教育』13, 12-23

堀幸雄, 中山堯, 今井慈郎（2011）「科目ネットワーク上の活性伝播を用いた時間割の自動生成システム」『情報処理学会論文誌』52(7), 2332-2342

堀幸雄, 西森友省, 今井慈郎, 中山尭（2013）「履修履歴を用いた科目成績の推定方法と検証」『情報知識学会誌』23(2), 193-198

保住芳美（2005）「大学における福祉科教育法の課題－高等学校福祉科教員養成のあり方を考える」『川崎医療福祉学会誌』14(2), 239-247

伊藤智里, 秋政邦江, 青井則子, 他（2014）「総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ－領域「言葉」「表現(身体表現・造形表現・音楽)」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連－」『川崎医療短期大学紀要』24, 29-37

伊東栄典, 島松千春, 廣川佐千男（2006）「Webシラバス統合による教育情報ライブラリー構築」『ディジタル図書館』30, 3-13

腰山豊（2006）「短大保育科における実践的指導力の形成と授業改善　8報－教育・保育実習の充実をめざす関連科目の授業実践事例－」『研究紀要』36, 1-19

公益財団法人大学基準協会（2017）『大学評価ハンドブック』

眞喜志まり（2008）「シラバス型パスファインダー作成の試み」『薬学図書館』53(4), 329-335

松崎大祐, 徐海燕（2009）「時間割をベースとする授業関連情報ポータルシステムの構築」『電気関係学会九州支部連合大会講演論文集』374

文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説福祉編』

中島英博（2016）『授業設計』玉川大学出版部

那須恒夫（2009）「オーストラリアにおける言語教育Part26－LOTE日本語教育シラバスの特徴－」『高知大学教育学部研究報告』69, 1-9

北村瑞穂（2016）「シラバスにおける授業目的と成績評価方法の変化－テキストマイニングを用いた探索的研究－」『四條畷学園短期大学紀要』49, 58-74

大池京子（2009）「学生の確かな学びを保証する, より充実した大学一般教養英語講座の構築を目指して－学生からの継続的フィードバックの活用」『言語センター広報 Language Studies』17, 9-15

坂井一貴（2014）「教育の質的向上と教育改善を目的とした Web シラバスシステムの構築」『富山短期大学紀要』49, 45-55

佐藤浩章, 八重樫文, 志水良, 川嵜有紀（2015）「座談会　教育を『見える化』することで見えてくるもの」『看護教育』56(12), 1148-1156

田村真広（2008）「高校福祉科教育に関する研究の課題と展望」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 高校福祉科の高度化と多様化』13, 10-24

田村聡子（2012）「高専新入生の基礎学力低下についての考察と体系化シラバス構築への提案」『釧路工業高等専門学校紀要』46, 119-129

山本知仁（2017）「学びの可視化と多様なアクティブラーニングを支援する e-シラバスの構築」公益社団法人私立大学情報教育協会ICT利用教育改善発表会運営委員会『平成29年度ICT利用による教育改善研究発表会資料集』90-93

Research on Syllabus for Sophistication of High School Welfare Department

Jun MIYAJIMA

Summary

In this research, Review of education change in high school welfare department was reviewed. And education guidelines for high school changed, we discussed how education in high school welfare department changed. I would examine how the teacher at the high school welfare department was educated. In particular, I examined syllabus on teaching profession = the welfare department education method and syllabus studies.

As a result, the syllabus of the future welfare department education law is divided into three categories: 1) structuring the evaluation of exercise as a method of class, 2) interactive tooling for communication of teachers and students, 3) student's self-growth evidence formation of recording medium, 4) tools for visualization of the educational system linked to the department policy. Implementing suggested improvements is the development of tools that contribute to sophistication of high school welfare department education. In addition, it will meet the expectations of students aiming for welfare department teaching and society.

Keywords：High school welfare department, Education method, Syllabus